

触れてはならない問題 とされた大月駅事故!

会社には一切の非はないと強弁

一昨年の大月駅事故の責任をめぐる裁判の判決が1月28日に甲府地裁でなされている。内容は事故の原因を当該運転士ひとりの責任とする、断じて許すことのできない反動判決であった。

大月駅事故で、改めて申し入れ

われわれは裁判が終決したことにふまえ、JR東日本本社および千葉支社に申し入れをおこなった。それまでJR東日本当局は、大月駅事故については、「警察の捜査中」「裁判継続中」を理由として、大月駅事故については、会社に刑事責任が及ぶことを恐れて、ごく簡単な事故速報以外は、その調査結果や会社の考え方を何ひとつ明らかにしてこなかったのである。

われわれが当局につきつめたのは、「大月駅事故発生に至る背後要因に関する調査結果、分析結果の詳細を明らかにせよ」「司法の場での判断が例えどのようなものであったにしろ、あのような重大事故を起こしてしまつたことは事実であり、教育

のあり方、指導のあり方、業務内容を全く知らない運転士を乗務させてしまったこと等について、会社としての責任がないという事にはならない。また、どのような要因が重なつてあのような事故に至つたのか、その詳細を明らかにする義務があるはずだ」という点であった。

会社には一切非がないとの回答

ところがJR東日本本社は、またも「運転士がATS電源スイッチを切つて停止現示の入換信号機を暴進したために発生した」という結果だけを繰り返し、「会社に一切非はない」と言い張つたのである。本社安対の回答は次のようなものであった。

会社としては一切責任がないという立場なのか。

今回の事故は確かに鉄道事業者として列車脱線によってお客様に迷惑をかけたとい社会的な責任はある。しかし、運転士にはちゃんとした教育を行い、国家試験に相当する

試験も受け、その後も毎月の訓練やダイヤ改時の訓練を行い、要注意事項も手渡すなど、必要なことはすべてやつていて、背後要因は何か、という事故の原因は、運転士が自らの責任でやるべきことをやつていなかったことにある。

当該の運転士は色燈式と燈列式の信号の区別もつかず、作業手順も承知していない、守るべきことも守っていないなど、運転士の資格に欠けていた。しかし、資格をとつたら立派な運転士なんです! 会社は他の私鉄と比べてもハイレベルな教育を行つており、ハイレベルな運転士を養成している。

まさに、怒りなしには聞くことのできない回答だ。言つていくには耐えられないが、ここに示されているのは、安全という最も重要な問題についてさえ、自らを顧みようという姿勢の欠片すらない傲慢の極みであり、安全対策や運転士養成システム、日常的な指導訓練・業務運営のあり方、

そして労務政策の問題点など本質的な部分に火の手を及ぼさなためのみ、「とにかくすべて運転士が悪い!」と叫びたてる矮小な姿である。

本社からは何も聞いていない?

われわれは千葉支社に対して、同様に大月駅事故の教訓をいかに考えているのかを申し入れた。支社は現場を抱えており、事故の教訓をいかに運転士に伝え、運転保安対策として具体化していくのかが、日常不断に問われている。しかし、支社の回答も次のとおりであった。

大月駅事故に関しては、率直に言つて、事故翌日に本社から第一報を受けて以降、今まで本社からは第二報も第三報もまったく入っていない。だから細部の内容については答えようがないが、支は支社の立場で必要な対策は施してきた。——以上である。

不可触の問題とされた大月事故

千葉支社はこの間の交渉のなかでも、「新聞報道以上のことは全く聞かされていない」と言つてきたが、今回の本社支社交渉を通してはつきりとしたことは、JRのなかでは、大月事故は一切触れてはならない問題として扱われているということである。なぜか。それは、大月駅事故をほり下げたとたん、J

R東日本という会社の本質的な暗部に突きあたるからだ。それはこの間われわれが明らかにしてきたとおり、資本と革マルの結託体制という暗部である。だからこそJR総連・革マルも事故の当初から自らの組合員でもある運転士に一切の責任を転嫁する主張を繰り返して、当該の運転士は、誰ひとりとし守つてくれる者もない状況のなかで、JR総連を脱退し個人で裁判を行わざるを得なくなり、判決が確定した今は処分の決定を待つ身である。

不誠実団交だ!

山手貨物線では、あまりにズサン、あまりに無責任なJRの対応によつて、五名の下請け労働者が殺されている。JRは、下請け・孫受け・曾孫受けの業者に仕事を投げたまま、保安対策をはじめ何一つ責任をとうろくしていないことが今回の悲惨な事故であらわになつた。

本社交渉では、この間発生した鉄道運転事故や運転阻害事故の具体的な内容の解明を求めたが、運転阻害事故の発生件数すら、「数字がひとり歩きする可能性はある」といつて明らかにしようとはせず、不誠実団交を繰り返している。これが現在のJR東日本の実態だ。

われわれはこんな現状を断じて許すことはできない。われわれはこのような事態に対しては、現状がどんなに困難であろうと、運転保安確立に向けて断固として闘う決意である。